

『シオちゃんえっちな声し過ぎだよ？お母さんびっくりしたんじゃないかな？』

『だって……気持ち良くなっちゃったから……♡ご主人様のおちんちん凄く上手なんだもん……♡』

『ははは、それは嬉しいなあ、でも、こんなに大きいのはうちの塾では僕だけだよ？ね、シオちゃん？』

『はい……♡ご主人様よりイイおちんちん……食べたことない……♡』

『まじか……』

俺は思わず呟いてしまった。あの紫央里に彼氏がいるなんて話は聞いたことがない。じゃあおっさんとやり始めてから他の男ともやってるのか？何それ、俺の紫央里ちゃんがこんなにビッチになってるなんてショック過ぎる。なんてな。

『それにしても補講終わった後もお勉強して、勉強熱心で偉いなあ。さすが特待生だね？』

『ああん♡そんな褒められたらあ……♡』

『ああ！可愛いよシオちゃん！』

『あひいい♡イクウウ…』

二人はお互い絶頂を迎え、息を整えていた。

『はあ……はあ……シオちゃんは勉強熱心だねえ』